

## 校異源氏物語・まほろし

春のひかりをみ給につけてもいと、くれまとひたる様にのみ御心ひとつはかな  
しさのあらたまるへくもあらぬにとにはれのやうに人々まいる給ひなどすれ  
と御心ちなやましきさまにもてなし給てみすの内にのみおはします兵部卿の宮  
わたりたまへるにそた、うちとけたるかたにてたいめんし給はんとて御せうそ  
こきこえたまふ

わかやとは花もてはやす人もなしなに、か春のたつねきつらんみやうち涙  
くみ給て

香をとめてきつるかひなく大方の花のたよりといひやなすへきこうはいの  
したにあゆみいて給へる御さまのいとなつかしきにそれよりほかにみはやす  
へき人なくやとみ給へる花はほのかにひらけさしつ、おかしきほとんどの匂なり御  
あそひもなくれいにかはりたることおほかり女房なども年ころへにけるはすみ  
そのめのいろこまやかにてきつ、かなしさもあらためかたく思ひさますへき世な  
く恋きこゆるにたえて御かたかたにもわたり給はすまきれなくみたてまつるを  
なくさめにてなれつかうまつれるとしころまめやかに御心と、めてなとはあら  
さりしかと時／＼はみはなたぬやうにおほしたりつる人々もなか／＼かゝるさ  
ひしき御ひとりねになりてはいとおほそうにもてなし給てよるの御とのいなど  
にもこれかれとあまたをおましのあたりひきさけつ、さふらはせ給つれ／＼な  
るまゝにいにしへの物かたりなし給おり／＼もありなこりなき御ひしり心の  
ふかくなりゆくにつけてもさしもありはつましかりけることにつけつ、なか比  
ものうらめしうおほしたるけしきるときときみえ給しなどをおほしいつるにな  
とてたはふれにてもまたまめやかに心くるしきことにつけてもさやうなるこゝ  
ろをみえたてまつりけんなに事もらう／＼しくおはせし御心はえなりしかは人  
のふかき心もいとうみしり給なからゑんしはて給ことはなかりしかと一わた  
りつ、はいかならむとすらんとおほしたりしをすこしにても心をみたり給けむ  
ことのいとおしうくやしう覚給さまむねよりもあまる心ちし給ふそのおりのこ  
との心をしりいまもちかうつかうまつる人々はほの／＼きこえいつるもあり入  
道の宮のわたりはしめ給へりしほどそのおりはしも色にはさらにいたし給はさ

りしかと事にふれつゝあちきなのわさやとおもひたまへりしけしきのあはれなりしなかに雪ふりたりしあかつきにたちやすらひてわか身もひえいるやうにおほえて空のけしきはけしかりしにいとつかしうおいらかなるものからそてのいたうなきぬらし給へりけるをひきかくしせめてまきはし給へりしほどのようゐなとをよもすから夢にても又はいかならむ世にかとおほしつゝけらるあけほのにもさうしにおるゝ女房なるへしいみしうもつもりにける雪かなといふこゑをきゝつけ給へるたゝそのおりのこゝちするに御かたはらのさひしきもいふかたなくかなし

うき世には雪きえなんと思つゝおもひのほかになをそ程ふるれのまきは

はしには御てうつめしてをこなひし給うつみたる火おこしいてゝ御火おけまいらす中納言君中將の君などおまへちかくて御物かたりきこゆひとりねつねよりもさひかりつる夜のさまかなかくてもいとおもひすましつへかりける世をはかなくもかゝつらひけるかなとうちなかめ給われさへうちすてゝはこの人ゝのいとゝなけきわひんことのあはれにいとおしかるへきなとみわたし給しのひやかにうちをこなひつゝ経なとよみ給へる御声をよろしう思はんことにてたに涙とまるましきをましてそてのしからみせきあへぬまであはれにあげくれみたてまつる人ゝのこゝちつきせすおもひきこゆこの世につけてはあかすおもふへきことおさゝあるまじうたかき身にはうまれながら又人よりことにくちおしき契にもありけるかなとおもふことたえず世のはかなくうきをしらすへくほとけなどのをきて給へるみなるへしそれをしひてしらぬかほになからふれはかくいまはの夕ちかきすゑにいみしきことのとちめをみつるにすぐせの程もみつからの心のきはものこりなくみはてゝ心やすきにいまなん露のほたしなくなりたるをこれかれかくてありしよりけにめならず人ゝのいまはとてゆきわかれんほとこそいまひとときはのこゝろみたれぬへけれいとはかなしかしわろかりける心の程かなとて御めおしのこひかくし給にまきれすやかてこぼるゝ御涙をみたてまつる人ゝましてせきとめむかたなしさてうちすてられたてまつりなんかうれはしさをのゝうちいてまほしけれとさもえきこえずむせかへりてやみぬかくのみなけきあかし給へるあけほのなかめくらし給へる夕くれなどのしめやかなるおりゝはかのおしなへてにはおほしたらさりし人々をおまへちかくてかやうの御物かたりなどをし給中將の君とてさふらふはまたちいさくよりみたまひなれにしをいとしのひつゝみ給すくさすやありけむいとかたはらいなき事に思ひてなれきこえさりけるをかくうせ給て後はそのかたにはあらず人より

もらうたきものに心とゝめ給へりしかたさまにもかの御かたみのすちにつけて  
そあはれにおもほしける心はせかたちなどもめやすくてうなひまつにおほえた  
るけはひたゝならましよりはらうゝしとおもほすうとき人にはさらにみえ給  
はすかたちめなともむつまじき御はらからの宮たちなとつねにまいりたまへ  
れとたいめんし給ことおさゝなし人にむかはむほとはかりはさかしく思ひし  
つめ心おさめむとおもふとも月ころにほけにたらむ身のありさまかたくなしき  
ひかことましりてすゑの世の人にもてなやまれむ後の名さへうたてあるへしお  
もひかれてなん人にもみえさむなるといはれんもおなしことなれと猶をとにき  
ゝておもひやる事のかたはなるよりもみくるしきことのめにみるはこよなくき  
はまさりてをこなりとおほせは大将の君などにたにみすへたてゝそたいめむし  
給けるかく心かはりし給へるやうに人のいひつたふへきころほひをたにおもひ  
のとめてこそはとねんしすくし給つゝうき世をもそむきやり給はす御方かたに  
まれにもうちほのめき給ふにつけてはまついとせきかたき涙の雨のみふりまさ  
れはいとわりなくていつかたにもおほつかなきさまにてすくし給後の宮はうち  
にまいらせ給て三宮をそさうゝしき御なくさめにはおはしまさせ給けるはゝ  
ののたまひしかはとてたいのおまへの紅梅はいとゝりわきてうしろみありき給  
ふをいとあはれとみたてまつり給きさらきになれば花の木とのさかりなるも  
またしきもこすゑおかしうかすみわたれるにかの御かたみの紅梅に鶯のはなや  
かになきいてたれはたちいてゝ御覧す

うへてみし花のあるしもなきやとにしらすかほにてきゑる鶯とうそふきあ

りかせ給春ふかくなりゆくまゝにおまへのありさまいにしへにかはらぬをめて  
給ふかたにはあらねとしつ心なくなに事につけてもむねいたうおほさるれば大  
かたこの世のほかのやうにとりのねもきこえさらむ山のすゑゆかしうのみいと  
ゝなりまさり給山吹などの心ちよけにさきみたれたるもうちつけに露けくのみ  
みなされ給ほかの花はひとへちりて八重さく花桜さかりすきてかはさくらはひ  
らけ藤はをくれて色つきなとこそはすめるをそくとき花のこゝろをよく  
わきて色ゝをつくしうへをき給しかは時をわすれすにほひみちたるにわか宮  
まろか桜はさきにけりいかてひさしくちらさし木のめくりに帳をたてゝかたひ  
らをあけすは風もえ吹よらしとかしこう思ひえたりとおもひてのたまふかほの  
いとうつくしきにもうちゑまれ給ぬおほふはかりの袖もとめけん人よりはいと  
かしこうおほしより給へりしかしなとこの宮はかりをそめてあそひにみたてま  
つり給ふ君になれきこえんことのこりすくなしやいのちといふものいましは

しか、つらふへくともたいめんはえあらしかしてれいのなみたくみ給へれは  
いどものしとおほしては、のゝたまひし事をまかくしうのたまふとてふしめ  
になりて御その袖をひきまさくりなとしつゝまきはしおはすゝみのまのかう  
らむにおしかゝりておまへの庭をもみすのうちをもみわたしてなかめ給ふ女房  
などもかの御形見の色かへぬもありれいの色あひなるもあやなどはなやかに  
あらずみつからの御なをしも色はよのつねなれとことさらやつしてむもんをた  
てまつれり御しつらひなどいとおろそかに事そきてさひしく心ほそけにしめ  
やかなれは

いまはとてあらしやはてんなき人の心と、めし春のかきねを人やりならず

かなしうおほさるゝいとつれ／＼なれは入道の宮の御かたにわたり給にわか宮  
も人にいたかれておはしましてこなたのわか君とはしりあそひ花おしみ給心は  
えともふかゝらすいといはけなし宮は仏のおまへにて経をそよみ給けるなには  
かりふかうおほしとれる御道心にもあささりしかともこの世にうらめしく御心  
みたるゝ事もおはせずのとやかなるまゝにまきれなくをこなひたまひてひとか  
たにおもひはなれ給へるもいとうらやましくかくあまへ給へる女の御心さしに  
たにをくれぬることゝくちおしうおほさるあかの花のゆふはへしていとおもし  
ろくみゆれは春に心よせたりし人なくて花の色もすさましくのみゝなさるゝを  
仏の御かさりにてこそみるへかりけれとの給てたいのまへの山吹こそ猶世にみ  
えぬ花のさまなれふさのおほきさなとよしなたかくなどはきてさりける花に  
やあらんはなやかにゝきはゝしきかたはいとおもしろき物になんありけるうへ  
し人なき春ともしらすかほにてつねよりもにほひかさねたるこそあはれに侍と  
の給御いらへに谷には春もとなに心もなくきこえ給をこしもこそあれ心うく  
もとおほさるゝにつけてもまつかやうのはかなきことにつけてはそのことのさ  
らてもありなむかしと思ふにたかふゝしなくてもやみにしかなといはけなかり  
し程よりの御ありさまをいてなに事をやありしとおほしいつるにはまつそのお  
りかのおりかと／＼しうらうらうしう句おほかりし心さまもてなしことの葉の  
み思ひつゝけられ給ふにれいの涙もろさはふとこほれいてぬるもいとくるしゆ  
ふくれの霞たと／＼しくおかしきほとなれはやかてあかしの御かたにわたり給  
へりひさしうさしものそき給はぬにおほえなきおりなれはうちおとろかるれと  
さまようけはひ心にくゝもてつけてなをこそ人にはまさりたれとみ給につけて  
はまたかうさまにはあらてかれはさまことにこそゆへよしをもゝてなし給へり  
しかとおほしくらへらるゝにもおもかけに恋しうかなしさのみまされはいかに

してなくさむへき心そといとくらへくるしうこなたにてはのとやかにむかし物  
かたりなし給人をあはれと心と、めむはいとわろかへきこと、いにしへより  
思ひえてすへていかなるかたにもこの世にしふとまるへき事なく心つかひをせ  
しにおほかたの世につけて身のいたつらにはふれぬへかりし比ほひなと、さま  
かうさまにおもひめくらし、に命をもみつからすてつへく野山のすゑにはふら  
かさんにことなるさはりあるましくなむおもひなりしをすゑの世にいまはかき  
りの程ちかき身にてしもあるましきほたしおほうか、つらひていま、てすくし  
てけるか心よはうも、とかしきことなとさしてひとつすちのかなしさにのみは  
の給はねとおほしたるさまのことほりに心くるしきをいとおしうみたてまつり  
て大方の人めになにはかりおしけなき人たに心の中のほたしをのつからおほう  
侍なるをましていかてかは心やすくもおほしてんさやうにあさへたる事はか  
へりてかるくしきもとかしきなともたちいて、なかくなることなとはへる  
をおほしたつほどにふきやうに侍らんやつゐにすみはてさせ給かたふかうはへ  
らむとおもひやられ侍てこそいにしへのためしなとをき、侍につけても心にお  
とろかれおもふよりたかふ、しありて世をいとふついてになるとかそれは猶わ  
るき事とこそなをしはしおほしのとめさせ給て宮たちなともをとなひさせ給て  
まことにうききなかるへき御ありさまにみたてまつりなさせ給はむまてはみた  
れなく侍らんこそ心やすくもうれしくも侍へけれなといをとなひてきこえた  
るけしきいとめやすしさまでおもひのとめむ心ふかさこそあさきにをとりぬへ  
けれなどの給てむかしより物をおもふことなとかたりいてたまふなかに故後の  
宮のかくれ給へりし春なむ花の色をみてまことに心あらはとおほえしそれは  
おほかたの世につけておかしかりし御ありさまを、さなくよりみたてまつりし  
みてさるとちめのかなしさも人よりことにおほえしなりみつからとりわく心さ  
しにも物のあはれはよらぬわさなりとしへぬる人にをくれて心おさめむかたな  
くわすれかたきもた、かゝるなかのかなしさのみにあらずをさなき程よりお  
ほしたてしありさまもろともにおいぬるすゑの世にうちすてられてわか身も人  
の身もおもひつ、けらるゝかなしさのたへかたきになんすへて物のあはれもゆ  
へある事もおかしきすちもひろうおもひめくらす方かたくそふ事のあさから  
すなるになむありけるなど夜ふくるまでむかしいまの御物かたりにかくてもあ  
かしつへきよをとおほしなからかへり給を女も物あはれにおもふへしわか御心  
にもあやしうもなりにける心のほとかなとおほしゝらるさても又れいの御をこ  
なひに夜なかなりてそひるのおましにいとかりそめによりふし給つとめて御

ふみたてまつり給に

なくくもかへりにしかなかりの世はいつもついのとこよならぬによへ  
の御ありさまはうらめしけなりしかといとかくあらぬさまにおほしほれたる御  
けしきの心くるしさに身のうへはさしをかれて涙くまれたまふ

かりかゝしなはしろ水のたえしよりうつりし花のかけをたにみすふりかた  
くよしあるかきさまにもなまめさましき物におほしたりしをすゑの世にはかた  
みに心はせをみしるとちにてうしろやすきかたにはうちたのむへく思ひかはし  
給ひなからまたさりとてひたふるにはたうちとけすゆへありてもてなしたまへ  
りし心おきてを人はさしもみしらすりきかしなとおほしいつせめてさうくし  
き時はかやうにたゝおほかたにうちほのめき給おりくもありむかしの御あり  
さまにはなこりなくなりたるへし夏の御かたより御衣かへの御さうそくたて  
まつり給とて

夏衣たちかへてけるけふはかりふるき思ひもすゝみやはせぬ御返

は衣のうすきにかはるけふよりはうつ蟬の世そいとゝかなしきまつりの日

いとつれくにてけふは物みるとて人々心ちよけならむかしとてみやしろのあ  
りさまなどおほしやる女房などいかにさうくしからむさとにしのひていてゝ  
みよかしなどの給中将の君のひんかしおもてにうたゝねしたるをあゆみをはし  
てみ給へはいとさゝやかにおかしきさましておきあかりたりつらつきはなやか  
ににほひたるかほをもてかくしてすこしふくたみたるかみのかゝりなとおかし  
けなりくれなゐのきはみたるけそひたるはかまくわんさういろのひとへいとこ  
きにひ色にくろきなとうるはしからすかさなりてもからきぬもぬきすへしたり  
けるをとかくひきかけなどするにあふひをかたはらにをきたりけるをよりてと  
り給ていかにとかやこのなこそわすれにけれとの給へは

さもこそはよるへの水にみくさめけふのかさしよ名さへわするゝとはち

らひてきこゆけにといとおしくて

大かたはおもひすてゝし世なれともあふひは猶やつみおかすへきなどひと  
りはかりをはおほしはなたぬけしきなりさみたれはいとゝなかめくらし給より  
ほかのことなくさうくしきに十よ日の月はなやかにさしいてたる雲まのめつ  
らしきに大将の君おまへにさふらひ給花たちはなの月影にいときはやかにみゆ  
るかほりもをひ風なつかしければ千世をならせるこゑもせなんとまたるゝ程に  
にはかにたちいつるむら雲のけしきいとあやにくにていとおとろくしうふり  
くる雨にそひてさとふく風にとうろもふきまとはしてそらくらき心ちするにま

とをうつこゑなとめつらしからぬふることをうちすし給へるもおりからにやい  
もかかきねにをとなはせまほしき御声なりひとりすみはことにかはることなけ  
れとあやしうさう／＼しくこそありけれふかき山すみせんにもかくて身をなら  
はしたらむはこよなう心すみぬへきわさなりけりなどの給て女房こゝにくた物  
などまいらせよおのこともめさんもこと／＼しき程なりなどのたまふ心にはた  
ゝ空をなかめ給ふ御けしきのつきせす心くるしければかくのみおほしまきれす  
は御をこなひにも心すまし給はんことかたくやとみたてまつり給ほのかにみし  
御おもかけたにわすれかたしましてことほりそかしと思ひゐ給へり昨日けふと  
おもひ給ふるほどに御はてもやう／＼ちかうなり侍にけりいかやうにかおきて  
おほしめすらむと申たまへはなにはかりよのつねならぬ事をかはものせんかの  
心さしをかれたるこくらくのまんだらなどこのたひなん供養すへき経などもあ  
またありけるをなにかしそうつみなその心くはしくきゝをきたなれば又くはへ  
てすへきことゝもゝかのそうつのいはむにしたかひてなむものすへきなどの給  
かやうの事もとよりとりたてゝおほしおきてけるはうしろやすきわさなれとこ  
の世にはかりそのの御契なりけりとみ給にはかたみといふはかりとゝめきこえ  
給へる人たにもし給はぬこそくちおしう侍れと申給へはそればかりならすい  
のちなかき人々にもさやうなる事のおほかたすくなくけるみつからのくちお  
しさにこそゝここにこそはかとはひろけ給はめなどの給なに事につけてもしのひ  
かたき御心よはさのつゝましくてすきにしこといたうもの給いてぬにまたれつ  
る山ほとゝきすのほのかにうちなきたるもいかにしりてかときく人たゝならす  
なき人をしのふるよひのむら雨にぬれてやきつる山ほとゝきすとていとゝ  
そらをなかめ給ふ大将

ほとゝきす君につてなんふるさとのなたち花はいまそさかりと女房など  
おほくいひあつめたれとゝとめつ大将の君はやかて御殿ゐにさふらひ給さひし  
き御ひとりねの心くるしければ時々かやうにさふらひ給におはせし世はいとけ  
とをかりしおましのあたりのいたうもたちはなれぬなどにつけてもおもひ出ら  
るゝこともおほかりいとあつきころすゝしきかたにてなかめ給に池のはちすの  
さかりなるをみ給にいかにおほかるなとまつおほしいてらるゝにほれ／＼しく  
てつく／＼とおはするほどに日もくれにけり日くらしのこゑはなやかなるにお  
まへのなてしこのゆふはへをひとりのみゝ給ふはけにそかひなかりける  
つれ／＼と我なきくらす夏の日をかことかましきむしのこゑ哉蜚のいとお  
ほうとひかふも夕殿にほたるとんてとれいのふることもかゝるすちにのみくち

なれたまへり

よるをしるほたるをみてもかなしきは時そともなきおもひなりけり七月七

日もれいにかはりたることおほく御あそひなともし給はてつれ／＼になかめく  
らしたまひて星逢みる人もなしまた夜ふかうひと所おき給てつまとおしあけた  
まへるにせんさいの露いとしけくわたとのゝとよりとをりてみわたさるれはい  
て給て

七夕のあふせは雲のよそにみてわかれの庭に露そをきそふかせのをときへ  
たゝならすなりゆくころしも御法事のいとなみにてついたりころはまきはし  
けなりいまゝてへにける月日よとおほすにもあきれてあかしくらし給ふ御正日  
にはかみしもの人ゝみないもゐしてかのまんだらなとけふそ供養せさせ給れい  
のよひの御をこなひに御てうつなとまいらす中將の君のあふきに

君こふる涙はきはもなき物をけふをはなにのはてといふらんとかきつけた  
るをとりてみ給て

人こふる我身もすゑになりゆけとのこりおほかる涙なりけりとかきそへた

まふ九月になりて九日わたおほひたる菊を御らんして

もろともにおきゐし菊のしら露もひとりたもとにかゝる秋かな神無月には  
おほかたも時雨かちなる比いとゝなかめ給てゆふくれの空のけしきもえもいは  
ぬ心ほそさにふりしかとゝひとりちおはす雲井をわたる雁のつはさもうらや  
ましくまほられ給ふ

おほそらをかよふまほろし夢にたにみえこぬ玉のゆくゑたつねよなにと  
につけてもまきれすのみ月日にそへておほさる五節などいひて世中そこはかと  
なくいまめかしけなるころ大將殿の君たちわらは殿上し給へるいてまいり給へ  
りおなし程にてふたりいとうつくしきさま也御おちの頭中將藏人少將などをみ  
にてあをすりのすかたともきよけにめやすくてみなうちつゝきもてかしつきつ  
ゝもろともにまいり給おもふ事なけなるさまともをみ給にいにしへあやしかり  
し日かけのおりさすかにおほしいてらるへし

宮人はとよのあかりといそくけふ日かけもしらてくらしつるかなことしを  
はかくてしのひすくしつれはいまはと世をさり給へきほとちかくおほしまうく  
るにあはれなる事つきせずやう／＼さるへきことゝも御心の中におほしつゝけ  
てさふらふ人ゝにもほと／＼につけてもの給ひなとおとろ／＼しくいまなんか  
きりとしなしたまはねとちかくさふらふ人ゝは御ほいとけ給へきけしきとみた  
てまつるまゝにとしのくれゆくも心ほそくかなしきことかきりなしおちとまり



てかたはなるへき人の御ふみともやれはおしとおほされけるにやすこしつゝの  
こし給へりけるをものゝついでに御覧しつけてやらせ給ひなとするにかのすま  
のころほひところゝよりたてまつれ給けるもあるなにかの御てなるはこと  
にゆひあはせてそありけるみつからしをき給ける事なれとひさしうなりける世  
のことゝおほすにたゝいまのやうなるすみつきなとけに千とせの形見にしつへ  
かりけるをみすなりぬへきよとおほせはかひなくてうとからぬ人々三人はか  
りおまへにてやらせ給ふいかゝらぬほとのことにてたにすきにし人のあとゝ  
みるはあはれなるをましていとゝかきくらしそれともみわかれぬまでふりおつ  
る御涙の水くきになかれそふを人もあまり心よはしとみたてまつるへきかかた  
はらいたうはしたなければおしやりたまひて

しての山こえにし人をしたふとて跡をみつゝも猶まとふかなさふらふ人々  
もまほにはえひきひろけねとそれとほのゝみゆるに心まとひとをろかなら  
すこの世なからとをからぬ御わかれのほとをいみしとおほしけるまゝにかいた  
まへることのはけにそのをりよりもせきあへぬかなしさやらんかたなしという  
たていまひときはの御心まとひもめゝしく人わるくなりぬへければよくもみ給  
はてこまやかにかき給へるかたはらに

かきつめてみるもかひなしもしほ草おなし雲井の煙とをなれとかきつけて  
みなやかせ給御仏名もことしはかりにこそはとおほせはにやつねよりもことに  
尺定のこゑゝなどあはれにおほさるゆくすゑななきことをこひねかふもほと  
けのきゝ給はん事かたはらいたし雪いたうふりてまめやかにつもりにけり導師  
のまかつるをおまへにめしてさか月なとつねのさほうよりもさしわかせ給てこ  
とにろくなとたまはすとしころひさしくまいりおほやけにもつかうまつりて御  
覧しなれたる御導師の頭はやうゝ色かはりてさふらふもあはれにおほさるれ  
いの宮たちかんたちめなどあまたまいり給へり梅の花のわつかにけしきはみは  
しめて雪にもてはやされたるほとおかしきを御あそひなともありぬへけれと猶  
ことしまではものゝねもむせひぬへき心ちし給へはときによりたる物うちすん  
しなどはかりせさせ給まことや導師のさか月のついでに

春まての命もしらす雪のうちに色つく梅をけふかさしてん御返

千世の春みるへき花といのりをきてわか身そ雪とゝもにふりぬる人々おほ  
くよみをきたれともらしつその日そいてたまへる御かたちむかしの御ひかりに  
も又おほくそひてありかたくめてたくみえ給をこのふりぬるよはひのそうはあ  
いなう涙もとゝめさりけりとしくれぬとおほすも心ほそきにわか宮のなやは

んにをとたかかへきことなになをさせせんとはしりありき給もおかしき御  
ありさまをみさらんことゝよろつにしのひかたし

物おもふとすくる月日もしらぬまに年もわか世もけふやつきぬるついたち

のほとのことつねよりことなるへくとをきてさせ給みこたち大臣の御ひきいて  
物しなくのろくともなにとなうおほしまうけてとそ